記念講演
「ベル会館を想う」

講師　倉方　厚子

皆さん、東京へようこそお越し下さいました。とてもうれしく思います。本日、日本聾史学会の方から「ベル福祉会館」について講演依頼をいただけてとてもうれしいです。なぜなら、ベル会館のことを知らない人が多く、この機会に皆さんにお話ができることはとてもうれしいです。

さて、ベル会館ができたのは昭和40年です。昭和40年というと、東京オリンピックが開かれた年です。その頃皆さんはまだ生まれていなかった方が多かったのではないかなと思います。あの当時、東京オリンピック開催に向けて、日本人は皆が頑張っていた。高速道路を建設したり、新しいビルを建てたりして頑張っていました。

でも我々ろうあ者の状況はそのときどうだったのでしょうか。ろうあ者に対してはまだまだ理解がなかった時代でした。手話への理解なんてまだまだの頃。手話ブームはまだ起きていませんでした。外で手話を使うのは「恥ずかしい」ということで隠れてこっそり手話で話すというようなこともあった。

ベル会館とはなにか。それはろうあ者の会館だった。ろうあ者が気楽に集まって手話で自由に語り合える場所が欲しいという気持ちから、全日本ろうあ連盟がカンパ活動を始めた。そのとき、たまたま目黒区にある碑文谷にとある聴者のおばあさんがおられたが、その方が亡くなられた。そのあと、跡継ぎがいなかったこともあり、国有地になった。その後、「ろうあ者が自分たちの会館を建てようと取り組んでいる。この土地をあげてはどうか」と考えた国会議員がいた。山下春枝さん、他の方々も動いていただいた。

その結果、理事会が設けられ、全日本ろうあ連盟からは理事長の藤本敏文さんが参加し、他は国会議員等という名前だけ立派な方々でした。みなさん聴者。藤本さん一人だけがろうあ者でした。理事19人、監事２人で、監事にはろうあ者の大家さんがいました。このような組織で出発しました。

しかし、ろうあ者はなかなか意見を言えなかったのです。聴者だけが話し合って進んでしまいました。なぜなら手話通訳がいなかったからです。少しはいましたが、何人もいたわけではなかった。手話通訳がないためになかなか意見が言えず、藤本さんは苦しかったらしい。そんな背景があったのです。

ところで、まず最初に名前をどうするかを話し合ったわけです。結果的には「ベル会館」と決まったのですが、この「ベル」というのはなにか。それは電話を発明したアレクサンダー・グラハム・ベルという人の名前が由来だった。

藤本さんは、このベル会館をきちんとした施設にしたいと考えていた。ろうあ者のためにいろいろ頑張っておられた。ところが実は、理事会というものはあまり開かれませんでした。山下さんが忙しい忙しいということで、なかなか会議は開かれないままだったのですが、国からお金が出ていることもあり、きちんとした話し合いもできないまま建設が始まってしまいました。そして昭和40年４月にベル会館がオープンしました。

あの当時は建設ラッシュの時代でした。そのため、ベル会館もそのラッシュの波に乗って、６階建ての建物になりました。２階までがベル会館。３階からはマンションになりました。これは、建

物を造るためにはお金がかかるので、マンションにしてそれを売ってしまおうと考えていたのです。しかしベル会館がオープンしたときは、既に東京オリンピックが終わった後で、ブームが終わってしまっていて、売れなかった。この辺りは後ほどお話しします。

さて、社会福祉事業の目的は大きく分けて二つありました。ろうあ者授産施設の設置運営、二つ目がろうあ者更生相談所の設置運営でした。このベル会館は東京都目黒区本郷1123番地にあります。しかし実は疑問がありました。それは事務所が二つあったことです。１つ目はベル会館、もう１つは千代田区霞が関2丁目。国会ですね。これは山下さんの事務所だったと思います。これはほんとうにおかしかった。ただ、先ほど説明したように、理事会は聴者18人に対してろうあ者は１人だったので、藤本さんは負けたのでしょう。

まずは授産施設についてお話しします。施設長は本城さんという人だった。厚生省から天下りでやってきた人でした。そして技術指導員は加藤さんという人でした。この方は仕事を教えておられた。そして私は生活指導員として入りました。加部というのは私です。そして事務員の渡辺さん。この４人は常勤です。次に看護師の古賀さん、炊事担当の木村さん、栄養士の藤岡さん、医師の岸さんが時々来る、つまり嘱託としてでした。

授産施設を始めるとき、聾唖者への仕事をどうするか話し合いがあったらしい。昭和40年ごろのろうあ者の仕事はというと、理容業、そして和裁業のこの二つが中心だった。このほかには木工や印刷業、歯科技工士など。このように範囲が限られていた時代だった。その中で何を教えるか、まず最初は理容はどうかと。しかし理容を教えるためにはお金がかかる。ハサミや理容台などは高かった。では洋裁か、しかし洋裁はミシンが必要で、そのミシンも高かった。一番安く経費がかからないのはなにか、和裁です。なぜかというと、和裁は細長い台とアイロン、そして針があればそれだけでできる。そういうことで和裁を教えることになった。そのため、対象は女性30人ということになった。この授産施設は昭和41年４月開所を予定していました。

私は実は、昭和40年４月にリハビリセンター、

昔のろうあ会館に入って手話を学んだのです。その後にベル会館が職員を募集しているということで、ベル会館に行って面接を受けました。その時にベル会館の人から言われたのは、私は補聴器をつけているが音は聞こえますか？というものだった。音はわかるが、電話はできないとはっきりと説明しました。結局は聞こえるならかまわないということで採用が決まりました。そして12月にベル会館へ就職しました。

その後はいろいろと事務の中心で、本城さんと一緒に全国の福祉事務所や都福祉課に、授産施設が始まりますよ、という案内を郵送したりした。事務員にもいろいろと助けてもらいながら、資料の印刷とか封筒への紙入れなどを繰り返す毎日でした。翌年4月、入所してきたのは残念ながら４人だけでした。

入所方法についてですが、まず入るために何が必要かというと、身体障害者手帳を持っていることが条件でした。そして15歳以上の女性です。次に病気を持っていないこと。これらの条件に当てはまれば、福祉事務所に申請をしてから入所が認められます。そういう流れでした。入所に必要な経費で何が必要かというと、食費でした。指導訓練と宿泊は無料で、食事だけ自己負担という条件になっていました。

ある日、ろうあ者がいるという情報があって、施設長と一緒に千葉県に行ったことがあります。訪ねた家にはろうあの娘がいて、ベル会館で和裁を習えるという説明をしたのですが、母が「心配だ」と言うのです。娘が家を出るのは心配だということですね。娘はベル会館に入りたいみたいだったのですが、母が認めなかったのです。本当

に残念でした。

そして昭和41年に授産施設がオープンし、４人が入所しました。このころ、私は全日本ろうあ連盟とは関係がなかったのです。もちろん会費を払っていないので、連盟の情報は何も入りませんでした。ですから、全国ろうあ者大会のようなものも知りませんでした。その代わり、ベル会館は厚生省とのつながりが強かった。国の行事などにも呼ばれていました。第16回東京都身体障害者体育大会というのがあり、ろうあ者は参加ができませんでした。ですが、ベル会館の入所者は他の身体障害者と一緒に大会に参加できました。卓球競技に２人が参加したのです。厚生省と関係が深かったので、呼ばれて参加ができたのです。

昭和41年４月に４人が入所し、後に15人が入所してきて、合計で20人になりました。授産施設では毎月健康診断がありました。この健康診断はなにをするのかというと、珍しいと思いますが、「聴力検査」でした。近くにある病院に行って検査を受けていたのですが、補聴器会社の人が来たこともありました。全員聴力検査をしたのですが、そのとき、入所者の中には初めて「音」が聞こえたという経験をした人もいました。聴力検査ですから、音が聞こえるのは当たり前ですね。言葉などの単語はわかりません。

東京には板橋区にろうあ更生寮というのがあり、そこには入所者がたくさんおられたので、盆踊りなどで交流したこともあります。福祉事務所や羽田空港へ見学に行ったりもしました。羽田空港へなぜ行ったのかというと、実は入所者の４人は全員が農村出身で、東京の生活に慣れてもらいたいということでいろいろと連れて行った先の一つが羽田空港でした。福祉事務所へは何のために行くのかというと、引っ越した時の手続きをどうするのかという勉強です。

一般教養訓練というのもありました。これは社会の情勢などを話したりしました。その中で一番大切だと痛感したのは、日本語、文章の読み書きができる力を身に付けることだということ。そのために文章教室をやったりもしました。他には茶作法訓練。ベル会館には茶道具などが全くなかったので、私が家から全部持ってきて使ったのです。

入所者が寝泊まりするところは２階にありました。ですが二段ベッドです。今では考えられませんね、でも昭和40年のころはこれが普通だったのです。食事は地下一階にあった炊事場で炊事担当職員が朝昼晩調理し、それを食べていた。昼は入所者たちが外に出てバレーボールなどをしていたりなどと、そういう生活でした。

１年が過ぎた後の昭和42年、ベル会館の授産施設は何をしていたのか。いろいろと調べていたら資料が出てきました。生活指導員として、毎月入所者のご家族に「たより」を書いて送っていた。ベル会館での生活はどうなのか、なにをしたのか、食費にいくらかかったか、というのが細かく書いてあった。そのたよりが残っていました。

さて、ここからがベル会館の問題についてです。昭和42年、この年に国会でベル会館についての質問が出たのです。なぜかというと、「ろうあ者のための会館ということで国有地を渡したのに、マンションになっている。これはおかしい」ということで、国会議員が質問をしたのです。さらに建築の際にかかった費用を建設会社にまだ払っていないという問題も判明した。法人の乱脈経営も都の検査で分かった。そのような内容がさまざまな新聞に掲載され、国会でも大きな問題になっていった。この時に施設長の本城さんが解雇となり、退職しています。

毎朝、新聞がベル会館に届きますが、施設長の命令で、まずベル会館関連の記事がないかを確認し、もしあればその記事を切り抜いて捨てろと言われたのです。本当におかしい、悔しかった。入所者は切り抜かれた後の新聞しか読めないのです。逆の立場になってみると、入所者にとっては「切り抜かれた記事には何が載っていたのか」と気に

なると思います。本当に辛くて悔しかった時期でした。

そして昭和43年５月17日、ベル会館の１階が赤紙でベタベタ貼られていて使えなくなった。地下の炊事場も閉鎖されてしまいました。強行封鎖です。２階の和裁室だけは授産事業に必要なので閉鎖されませんでした。炊事場が閉鎖されてしまい、ご飯が作れなくなったのには本当に困りました。やむをえないので、２階の洗面場で食事を作ることになったのです。施設長や和裁の技術指導員も交代してしまったのです。入所者も少しずつ辞めていく人が出て来ました。本当に大変でした。

昭和43年12月、ついにベル会館授産施設が閉鎖されることになります。その時まで残っていた入所者１人１人と面談し、「これからどうするか」を話し合い、実家に帰る人もいましたが、約半数は社会福祉法人友愛十字会の授産施設に入所することになり、去っていきました。残りはベル会館を出た後、仕事を見つけて就職したりして東京に残った人もいます。ベル会館は３年間だけで閉鎖されてしまいました。私も12月で退職しました。

ですが今ここで話をしたい。藤本さんのお話です。ベル会館を建設することになったとき、藤本さんは理事長の山下さんに「いつ完成しますか」、「どのくらい進んでいますか」と手紙で質問を何回もしたが、まったく返事がなかった。山下さんは藤本さんのことを完全に無視して、動こうともしなかった。そのときの藤本さんの悩みが実は手紙で残っています。あの当時、藤本さんはある先生に手紙でいろいろと相談をしていて、その先生が亡くなられた後、手紙が捨てられると聞いた。慌てて、捨てないでほしいとお願いして譲ってもらったのです。今も大切に保管しています。

その手紙の中に、「ベル会館の理事の中でろうあ者は私一人で聴者が多い。１人で頑張っているが、どうしたらよいか悩んでいる。ベル会館ができたら、中に全日本ろうあ連盟の事務所を置きたい。しかし山下さんにお願いしても無視される」というようなことが書いてあった。そういう手紙を藤本さんはたくさん送っている。この悩みは自分一人では解決できない、だが進んだ結果は自分で責任を持つ、そういうことをはっきりと書いています。本当に藤本さんは悔しかったのだろうと思う。

全日本ろうあ連盟はあの当時、何を考えていたのか。藤本さんは今でも疑問に感じているのではないか。全日本ろうあ連盟の理事会に「ベル会館の中に事務所を置きたい」と提案してもはっきりとした回答が出なかったらしい。藤本さんの奥さん、名前は光子さんですね。そのとき光子さんは病気で病院に入院していました。その光子さんから私に手紙が届きました。「病気のためにベル会館の支援ができない。お願いします」と頼まれたのです。それくらい藤本さんは本当に悔しい気持ちだったのだろう。

昭和42年の夏休みに藤本先生の家に行ったことがあります。授産施設に夏休みとは不思議かもしれませんが、8月の東京は暑かったので入所者には実家に帰ってもらって、ベル会館にはだれもいませんでした。それで私も夏休みを取りました。藤本さんから手紙が来て、大阪においでということで遊びに行ったのです。

あのときまだ新しい新幹線に乗って、新大阪駅で乗り換えて淀川という駅で降りて待っていたのですが、藤本さんが来ない。手紙では駅まで迎えに行くと書いてあったのにいないから周りを探してみると、柱の後ろに帽子をかぶっているおじいさんが座っていた。座って本を読んでいる。よく見てみると藤本さんだった。いつも東京に来るときはスーツにネクタイという姿だったので、それからはとても想像できないおじいさんだったけれども、無事に会えてよかった。

一緒に家まで案内してもらったのですが、道が狭い。しかも歩道と車道の区別がなかった。その時に藤本さんは私を歩道側にどかして、自分が車道側に立って歩いてくれた。女性は歩道側、守ってもらう立場だから、とおっしゃっていた。たまたま後ろからトラックがきたときに運転手から「なぜどかない」と怒鳴られた。しかし藤本さんは逆に、「自分は聞こえない」と返した。昭和42年ですよ。あの当時にああいうことが言えた。運転手はそのまま運転して去っていった。「自分は聞こえないのだからわからない。ろうあ者がいるということを理解してもらう必要がある」と、そういう姿勢だった。本当にすごい人。

家に着くと光子さんがおられた。盲ろうだった

が、とてもかわいくて美人だったのが印象的だった。藤本さんの家には３日間お世話になり、いろいろとお話をした。本当は２日間の予定だったが、藤本さんが「明日まで待てるか」というので、なぜかと聞いたら、明日は給料日だからおいしいものを食べに行こう、とそう言われた。それで一緒に聾学校に行き、給料をもらった藤本さんと一緒にその足でおいしいものを食べに行った。

その後、本籍地証明書を取りに行きたいと藤本さんが言うので、藤本さんの実家があるところまで行ってきた。電車に乗って行ったが、本来降りるべき駅は急行は止まらなかったのに、私たちは間違って急行に乗ってしまったので乗り越してしまった。それで引き返してきてようやく降りることができた。このときに改札口で切符を渡すと、本来の経路で乗らなかったので駅員さんが「これはおかしい」と怒ってきた。だがその時に藤本さんは、「私は耳が聞こえないから急行だということに気づかないで乗って乗り過ごしてしまったのだ。だから引き返してきた」と話すと、駅員さんから「その行き過ぎた分と戻ってきた分の料金を支払う必要がある」と言われた。

しかし、それでも藤本さんは「聞こえないのだから、間違って乗っただけだ。自分に責任はない。支払う必要はない」と譲らなかった。それでも駅員さんは「払うように」と。そのやり取りを見ている間、私はうろたえているだけでした。結局駅員さんが譲らないので、胸ポケットから身分証を取出して駅員さんに提示したのです。その身分証とは、「全国中央福祉審議会議員」のものでした。そういう証明書があるのです。これは国の準公務員のようなものです。それを見た駅員さんは慌てて、「どうぞお通り下さい」と態度を一変。その光景は今でも忘れられません。

役場に着いた後、本籍地証明書をもらうために私も一緒について行って、私が担当の人に声を出して話すんですね。証明書をくださいと。そしたら簡単に証明書を発行してもらえました。そのときに藤本さんから言われた言葉を今でも覚えています。それはなにかというと、「いつも通訳者と一緒に行くが、手話通訳の人は自分のことを威張っていると言う。けれども加部と一緒に来て話してもらったら、簡単に証明書を出してくれた。よかった」と言われました。

その時ほんとうに思いました。手話通訳者の中には、ろうあ者を支えるという意識から自分を上にしてろうあ者を下に見る人がたくさんいる。藤本さんは立派な方で日本を代表するろうあ者なのに、そういう態度を手話通訳者の人から受けることもあるんだなぁと痛感させられました。あの時以来、手話通訳者というものは倫理というものをきちんと身に付けなければならないと思ったのです。

ということで、この３日間の間で藤本さんには３つのことを学びました。一つ目は「社会の中には聞こえない人もいるのだということを広めていく必要がある」ということ。二つ目は「聞こえない人に対する配慮をきちんとできるようにしていかなければならない」ということ。三つ目は「手話通訳制度をきちんと整備し、よりよくしていかなければならない」ということでした。これ等のことを藤本さんから学ぶことができたことはとても幸せなことだったなと思います。

最後になりますが、「まぼろし」のベル会館、「実在」したベル会館、ベル会館でさまざまなことを学んだものをもとにして、ろうあ運動の基本を学びました。まさに私は「ベル会館」から人生をスタートした立場から一言。ベル会館はまぼろしではありません。実在したのです。

それでは、これで終わりたいと思います。長い間お聞きくださりありがとうございました。

現在のベル会館跡（東京都目黒区碑文谷）